

『リモージュ司教にしてガリアの使徒である
聖マルシアルの伝記』(I-XIII) 試訳

渡 邊 浩

凡例

1. 本訳文は Vita eivsdem S.Martialis episcopi Lemovicensis et Galliarvm apostoli, conscripta ab Avreliano Lemouicensium episcopo, Diui Marcialis auditore olim eius beneficto à mortuis excitato edita vero ex MS. Ecclesiae S. Marcialis Parisiis à R. Fr. Thoma Beaulxamis Carmerita : in L. Surius, *De probatis sanctorum vitis* (Cologne, 1618), 6: 365-374 の試訳である。ただし、ここに訳出した箇所は全 27 章のうちの最初の 13 章にあたり、残りの章については次号への掲載を予定している。なお、このテキストの入手に当たっては Universitäts- und Landesbibliothek Sachsen-Anhalt in Halle (Saale) よりマイクロフィルムの提供を受けた。
2. 現代語訳としては R. Landes et C. Paupert, *Naissance d'apôtre: La vie de saint Martial de Limoges*, Turnhout, 1991, pp.45-104 に仏訳があり、翻訳に当たってはこれを参照した。
3. 仏訳における各章の表題は原本の欄外に書かれた文章である。これら欄外の文章は単なる表題ではなく、最初の一、二文を除くと、欄外註のようにアルファベットが付され、本文中のアルファベットが付された箇所と対応している。この試訳でも仏訳にならって欄外の文章を各章の表題としたが、アルファベットは残した。また、原本ではページ毎であったり章毎であったりしたアルファベットの振り方を、ここでは章毎に統一した。さらに、欄外の文章にはアルファベットを欠いたものもあるが、訳者がアルファベットを補い、本文との対応関係を

示した場合もある。

4. 原本では段落の区切りがないが、本試訳では仏訳に従って段落を区切った。
5. 固有名詞はラテン語読みを基本としたが、聖マルシアルや聖ペテロなど、慣用化した呼称を用いた場合もある。
6. 聖書の引用箇所指摘については、仏訳の注に基づいたが、訳者が訂正した箇所もある。また、訳文は原則として『新共同訳聖書』に従った。

I. マルシアルの父と母がキリストの指導に従った経緯。マルケルスの家族はペテロから洗礼を受ける。

我らの主イエス・キリストがユダヤでベニヤミン族に教えを説いていたとき、ユダヤ人の群衆が彼のもとに集まっていた。彼らはイエスに飲食に必要なものを提供し、と同時に魂の救いに関わる教えを聴きたいと望んでいた。

この群に混ざって、前述の部族出身で、マルケルスという名の、ユダヤ人のうちでも高貴な人物がイエスのもとにやって来た。彼はエリザベトと言う名の妻と15才になる一人息子マルシアルを連れていた。ところで、「悔い改めよ。天の国は近づいた（「マタイによる福音書」3章2節）。だれでも水と霊によって新たに生まれなければ、神の国に入ることはできない（「ヨハネによる福音書」3章5節）」と、主が命の救いとなる教えを説き、語るのを聴くと、彼らは心から悔い改めて、主が説いたように、洗礼の水による再生を自分たちに命じてくれるよう、主の限りない慈悲をしきりに求め始めた。それで、主の命令でマルケルスが、もちろん妻のエリザベトとともに、そして希な才能を備えた彼らの息子マルシアルが、至福なる使徒ペテロから洗礼を受けた。また、ザケルスと、後に主を埋葬したヨセフス、そして他の多くのユダヤ人が洗礼を受けたが、彼らを数え上げれば長くなり、列挙される名前の一覧は限りなく続くように思われる。

II. マルシアルは父の家を離れてキリストに従う。a) ラザロが蘇らされたとき、彼はそこに居合わせた。b) 体と血の秘跡。c) 彼は最後の晩餐において、キリストと使徒たちの給仕を務めた。d) 復活のその日、キリストが弟子たちに現れたとき、彼はそこに居合わせていた。e) 聖マルシアルは説教を行う権能を主から受けた。f) キリストが天に昇られたとき、彼はそこに居合わせ、キリストから祝福を受けることができた。

さて、皆が自分の家に引き返したとき、彼はよい望みを抱いて父の家には戻らず、主にすっかり身を委ね、主の教えにしっかりと留まり、使徒ペテロに従った。彼はペテロと近親関係で結ばれていたため、ペテロに励まされて、万事において、自らの師である主の救いについての教えに従うよう心がけた。a) さて、しばらくして主はベタニアでラザロを4日の後に蘇らせた。そしてその折、いとも聖なるマルシアルは主とともにそこにいた。b) 我らの主イエス・キリストが救いのための説教を終え、人の姿で弟子たちと食事をとり、そしてパンとぶどう酒の秘跡で自らの体と血の秘技を弟子たちに授けたとき、彼は食事の間に立ち上がって弟子たちの足を洗い、亜麻布で拭いた。c) このいとも聖なる人物マルシアルは、クレオパや他の多くの弟子たちとともに、例えば食べ物や飲み物の貯えや、弟子たちの足を洗ったり拭いたりするための水や亜麻布など、そうした準備に必要な物を調えるよう給仕の仕事に任された。d) また神聖で敬うべき復活の後、主イエス・キリストご自身が、不思議な仕方ではなく、人々の前で見せていた姿形で弟子たちに現れてくださり、彼らに「あなたがたに平和があるように（「ルカによる福音書」24章36節）」と言われた。しかし弟子たちは当惑して、主の命令で手や足に触れてみて、自分たちの前で蜂蜜を添えた焼き魚の一切れを食べているのが主だと分かるまで、亡霊を見ているのだと思った。このときいとも聖なるマルシアルは、他の弟子たちと同様、残り物に与る名誉を得た。ところで弟子たちが、主から命ぜられたとおりに、主がかつて教えられたガリラヤの山へと、主に会うために急いでいたとき、至福なるマルシアルは、聖なる洗礼を受けた後は少しの間でさえも他の場所へ行くことはせず、また至福なるペテロと近親者の特別な愛で結ばれていたため、弟子たちとともに行動を続けた。e) そして彼は他の使徒たちと同様、主が次のよ

うに述べたとき、主自身から福音を説く権能を受けた。「私は天と地の一切の権能を授かっている。行って、すべての民を教えなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい。（「マタイによる福音書」28章18-19節）」f) また、復活から40日後、主は天に昇ろうとして、弟子たちをベタニアへ連れて行った。主は両手をあげて天へと上げられ、弟子たちを祝福したが、このとき記憶すべき人物マルシアルは、他の使徒たちとともに祝福されるに値したのであり、彼らとともに断食と祈りを行い続けた。そして、キリストが父のもとへと昇った10日後に、火の舌の形をした聖霊が自らの上に下ってくるのを見るまで、彼は内でも外でも使徒たちとともに日々主を称え祝福した。そして他の使徒たちとともに教えを受けて、キリストの復活の揺るぎない証人であることを皆に示した。

III. 聖マルシアルは、ペンテコステの日、他の者たちとともに聖霊を受けた。ペテロとマルシアルはいつアンティオキアへたどり着いたか。

それから、聖霊を受けた後、至福なる使徒たちは信仰を強められてあらゆる地方へ散って行った。各々は神の種子に関する救いの説教で照らすべき国や地域を選んだ。そこで、使徒たちの頭である至福なるペテロと、彼の同伴者で近親者である至福なるマルシアルは、皇帝ティベリウスの治世の22年目、それは主の受難の5年後であったが、仲間となった多数の弟子たちとともにアンティオキアにたどり着いた。そして天の王国について公に福音を説き、すべての罪は贖わなければならないと語った。ところで至福なるペテロの求めに応じて、聖なるマルシアルは神の言葉を絶えず説き続けた。確かに、主は説教を行う彼らに大いに恩寵を施したので、教え切れないほどの人々がキリストへと改宗した。そしてキリスト教徒となった者たちは、教会のなかった場所に多くの教会を建てた。ところで、この者たちが建てた前述のすべての教会に、司教や司祭を助祭とともに叙階すると、記憶されるべき主の二人の弟子は、彼らに次のように忠告した。すなわち二人から聴いた救いについての教えを記憶に留め、自分たちを多量の血によって贖い、洗礼の水によって刻印したその方のみにつき従おうと、忠実に心がけるようにと。

IV. ペテロはアンティオキアで何年座を占めたか、そしてペテロの同伴者マルシアルはいつローマにやって来たのか。a)ペテロと彼の仲間はローマでコンスルのマルケルスに迎えられる。b)主はローマで至福なるペテロに現れ、マルシアルをガリアに派遣するよう促す。

これらのことが首尾よく進むうちに、使徒たちの頭であるペテロは、クラウディウス帝の治世の2年目に、7年間司教を務めたアンティオキアを去ってローマへと向かい、マルシアルに同行する許可を与えた。それは、聖なるものへの熱意と愛の表出を一つの報いとして得た者たち皆への褒美とするためであった。さて、彼らが旅立つとき、アンティオキア出身の弟子たちが彼らに同行した。そのなかには、アルピニアヌス、アウストゥリクリニアヌス、そして他の多くの者たちがいた。a)こうしてローマに入ると、彼らはローマ人たちのコンスルであるマルケルスの歓待を受け、彼の家にしばらく滞在した。そして彼らは公の場で命の救いとなる教えを説き、自分たちがキリストからの使者であることを明言した。それは、ローマ人たちが偶像への迷信を捨て、三つの位格を持つ真の神を知り、そのように知った神を尊重し、そして十字架にかけられて血を以て彼らを贖った方の僕であることを、彼らに自覚させるためであった。

b)ところで、彼らがそこに滞在している間に主がペテロに現れた。ペテロがローマに来てから2年目のことである。そして主はペテロに、至福なるマルシアルをガリア地方に遣わして説教を行わせるよう忠告した。それは、悪魔に捕らわれていた住民たちが、ついに永遠の命という報酬のことを聞き、邪教の誤りを捨て、買い戻された者となってキリストへの奉仕に身を委ねるためであった。また、真の信仰へ向けて、迷信的な誤りから離れるためであった。そこで、使徒たちの頭であるペテロは、至福なる人物マルシアルを呼び寄せ、主から命じられたすべてを彼に順序立てて話した。

V. マルシアルはペテロから離れることを望まなかった。a)彼はペテロに慰められる。b) ペテロはリモージュをマルシアルに委ねる。c) 真の殉教者そして説教者としての揺るぎなさ。

この話を聞いて、いとも聖なるマルシアルは激しく泣き始めた。とい

うのは彼は至福なるペテロから離れたくなかったからである。彼は遠くの地方と、神を知らず真理をまったく理解しない者たちを恐れていた。

a) 至福なるペテロは彼を優しく慰めて言った。「聖なる兄弟よ、気を落としてはいけません。なぜなら我々の師である主が常にあなたとともにいるのですから。それは主自身が『わたしは世の終わりまで、いつもあなたがとと共にいる（「マタイによる福音書」28章20節）』と言って、我々に約束してくださったとおりです。さらに、復活の後、主は我々に命じて、『全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受けるものは救われるが、信じないものは滅びの宣告を受ける（「マルコによる福音書」16章15-16節）』とおっしゃいました。至福なる兄弟よ、このことを我々二人が覚えておくことが大切です。我々が主の教えを忘れることのないために。さあ、だから、とても優れた者よ、私の言うことに従いなさい。従えばあなたは我々の仲間からはずれることとなります。腰を帯で締めなさい。少しも拒むことなく、急いで発つのに手間取ってはなりません。悪霊に仕えていると知られている人々を、神の崇拜という真の完全な信仰へと導きなさい。その人々が異教徒の誤謬から離れて、キリストへの信仰を告白できるようになるためです。

b) 実は、ガリア地方には、リモージュという名の不信仰の誤謬を免れた町があります。この町とその周辺をキリストがあなたに委ねるのは、この町があなたの説教をとおして主自身から称えられるためです。あなたには長い道のりが残っているのだから、私の言葉に従うのをためらってはなりません。あなたは、私の言葉によって、立派な褒美として自分の冠を手に入れるでしょう。あなたとともに二人の弟子を連れて行きなさい。彼らはあなたの伴侶となり、またあなたに服従を示し、冠という褒美を損うことはしないでしょう。

c) もし剣闘士があなたに立ち向かって来たなら、主の名のためにこの殺人者に首を差し出すほどの覚悟で振る舞いなさい。『あなたの右の頬を打つ者には、左の頬をも向けなさい。また、あなたの下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい（「マタイによる福音書」5章39-40節）』と主から聞いたとおりです。それほどまでに穏やかな気持ちでいるようにしなさい。」

VI. 崇高なマルシアルの伴侶たち。a) アウストゥリクリニアヌスが途中で亡くなる。b) マルシアルは聖なるペテロのもとに引き返す。c) ペテロの杖がマルシアルに与えられる。d) アウストゥリクリニアヌスが蘇る。

遅れることなく、いとも聖なる人物マルシアルは、二人の弟子アルピニアヌスとアウストゥリクリニアヌスを付き添いとした後、神が至福なるペテロを通じて彼に命じたとおりに、急いで旅支度をした。a) 旅を始めて道を急いでいると、こともあろうにマルシアルの伴侶の一人、至福なるアウストゥリクリニアヌスがエルセと呼ばれる場所で亡くなった。b) これを見て、至福なるマルシアルは落胆して急いでローマへ戻り、途中で自分の身に起こった一切を至福なるペテロに知らせた。ペテロは彼にいろいろと尋ねてから、次のように言った。c) 「私の杖を手にとってできるだけ急いで行きなさい。亡くなった兄弟を残して来た場所に着いたなら、それで死者の亡骸に触れなさい。私は繰り返し祈りましょう。そうすれば彼は直ちに眠りから覚めるように目覚め、すぐにあなたの仲間に加わるでしょう。」これらの言葉を信じて、その至福なる人はすぐに杖を手にとって亡骸のところへ到着した。d) 彼がそれで血の気を失った四肢に触れると、四肢は直ちに命を取り戻す。死んで失った光を、彼は自らの目で見始めた。それゆえ、この出来事をだれが次のように考えずに疑うだろうか。励ましを与える至福なるペテロの信仰が明らかとなったのであり、至福なるマルシアルはこれらの模範に促されたのであり、そしてこの模範に従ったゆえに彼は功績で飾られたのだ、と。このように、至福なるマルシアルと彼の弟子たちは、これほど広大な地域をめぐり、実りを生む神の言葉を至るところで広めていた。

VII. マルシアルはトゥルムにたどり着き、そこでアルヌルフスに迎えられる。a) そのときマルシアルは 31 才であった。b) アルヌルフスの娘が悪霊から解放され癒された。c) 悪魔の言葉。d) 悪魔祓い。

かくしてリムーザンにたどり着くと、彼はトゥルムの城へやって来た。彼はそこで富裕なアルヌルフスの歓待を受けた。彼はそこに 2 ヶ月留まったが、その間彼は神の説教を休むことなく説き、自分のところへやって来る者たち皆に、神の言葉を絶えず熱心に告げた。a) さて、その時彼

は31才であり、クラウディウス帝の治世の3年目であった。多くの人々が、たいへん有益な助言を聞き、また神がその僕を介して行っていたしるしを見て、毎日彼のところへ集まっていた。そして、彼の説教から学んだり、奇跡によって癒されることを望んでいた。b)ところで、前述の富裕なアルヌルフスには一人娘がいたが、彼女は毎日悪霊に苦しめられていた。c)そして至福なるマルシアルが家に入るや否や、悪霊は叫びを上げてこう言った。「お前がこの若い娘からおれを追い立てようとしているのは分かっている。お前とともにいる天使たちがおれをひどく苦しめているからだ。だが頼みがある。お前が宣べ伝えている十字架にかけられた者の名において、おれを地獄に送り返さないでくれ。」d)すると、至福なるマルシアルは答えた。「十字架に架けられたその方において、私はお前に求める。この娘の体を出て、もう彼女に入ってはならない。そして飛ぶ鳥もなく、人の住むところもない荒地へと行くがよい。」この声を聞くと、若い娘は汚れた霊を吐き、死んだようになった。それから至福なるマルシアルは彼女の手を取り、起きあがらせ、そして彼女を健康にして父親のところへ返した。ところで、マルシアルのうちには神聖さ、寛大さ、そして大いなる謙虚さがあった。また、主が「絶えず祈りなさい。(「ルカによる福音書」18章1節、「テサロニケ信徒への手紙一」5章17節)人は、何よりも自分自身が行わず、行為によって成し遂げなかったことを、他人にするよう教えることのないように」と言って、彼や他の弟子たちに命じたように、彼には不断の祈りがあった。

VIII. 皇帝ネロの親族であるネルヴァの息子が悪霊によって窒息させられるが、蘇えらされる。a) 皆の祈り。b) 聖マルシアルの祈り。c) 死者が起きあがる。d) 彼は洗礼を受けることを願う。e) 死んだその者が語る話。f) 地獄の描写。g) 人々が改宗する。

主はまた、マルシアルを介して、この地でもう一つ小さからぬ奇跡を行ったが、それは見過ごされてはならない。さて、ネルヴァという名のこの城の城主は皇帝ネロの親族であった。ところで、彼の息子が悪霊に窒息させられて死ぬという事件が起こった。それで、その若者の親族、すなわち父親、母親、そして居合わせた皆がやって来て、至福なるマルシアルの足下にひれ伏し、涙ながらにこう言った。「神の人よ。私たちを

助けてください。」さらに、彼らは皆泣き、嘆き声をあげて、彼の前に若者の体を横たえた。すると人々の涙に同情して、聖なる方自らも弟子たちとともに泣いた。a) そして、群衆がこの有様を見に集まってきたとき、至福なるマルシアルは次のように言った。「キリスト教徒も異教徒も、我々は皆で、主が彼を蘇らせてくださるよう祈りましょう。」確かに彼自身と彼の弟子、そしてそこにいたわずかなキリスト教徒たちが、この若者に蘇れと命じてくださるよう主に祈っていた。b) かくして至福なるマルシアルは主に嘆願し始めると、次のように述べた。「主よ、私は、あなたのひとり子と私にこの遠方の地に来るよう命じたペテロとによって、あなたに祈ります。この若者を蘇らせてください。それは、彼の蘇生を見て、多くの者が、私を介してあなたを信ずるためです。」それから、彼は若者の手を取ると自信を持ってこう言った。「ユダヤ人たちが十字架に架け、しかし3日後に死から蘇った、我らの主イエス・キリストの名において、起き上がりなさい。自分の足で立ちなさい。そしてあなたが地獄で見たことを人々に語りなさい。」c) 彼は直ちに起き上がり、そして至福なる方の足下に身を投げると大声をあげ始めて、こう言った。d) 「神の人よ。私に洗礼を授けてください。そして私に信仰のしるしをつけて、それによって私が救われるようにしてください。というのは、洗礼を受けない者はだれも救われることができないからです。」e) そして彼は付け加えてこう言った。「二人の天使が私のところに全速力で駆けつけて、聖なるマルシアルの祈りによって私は蘇ることになると言いました。f) 地獄は果てしなく、そこは嘆きと苦痛の場所です。そこは暗闇、うめき声、泣き声、深い悲しみ、そして決して止むことのない厳しくて恐ろしい寒さと暑さの場所です。噛みつく蛇、耐え難い悪臭、腐敗、さらに苦悩と決して死ぬことのない虫のいる場所です。そこには地獄の牢番たちがいて、様々な責め苦で奪い取った魂を苦しめます。」彼がこれらの、またこれに類する話を語ると、人々は皆叫び始めた。「この神の人が宣べ伝える方以外に神はいない。」g) ところで、男女合わせて3600人の者たちがこの城で洗礼を受けた。彼らは至福なる方に多くの贈り物を捧げたが、彼はそれらを貧者に与えるよう命じた。この後、彼は偶像の礼拝所へ赴き、見せかけの神々の像を壊し、破壊し尽くした。

IX. マルシアルは人々の前に現れる。至福なるマルシアルは神殿の祭司たちに殴られる。偶像の祭司たちは盲目となる。偶像は黙る。a) 悪霊は神の栄光を示す出来事をしゅしゅ白状する。b) 祭司たちの悔悛。c) 悪霊は命じられる。d) 悪霊は像を砕く。e) 大勢の群衆が洗礼を受ける。f) 体の麻痺した者が至福なるマルシアルによって癒される。g) マルシアルは贈り物を受けることを拒む。

その後、万事が首尾よく済むと、至福なるマルシアルは弟子たちとともにエルゲディウムという村にやって来た。そこでは異教徒の村人たちが、悪魔の誤謬にだまされて、多くの偶像を崇めていた。村に入ると、彼は福音を宣傳伝え始め、次のように語った。「だれも、水と聖霊によって生まれ変わり罪を償わなければ、神の王国に入ることはできない。」彼がこれらの教えやこれに類することを説いていると、偶像の祭司たちがやって来て、至福なるマルシアルと彼とともにいた者たちを酷く打ち付けた。しかし、主の人は弟子たちとともに主を称えていた。なぜなら、彼らは主の名のためにこれらの苦痛を耐えようと欲していたからである。確かに、聖なるマルシアルは、彼に次のように語った主と至福なる使徒ペテロの忠告を思い出した。「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。（「マタイによる福音書」5章39節、「ルカによる福音書」6章29節）また、もし剣闘士があなたに立ち向かって来たなら、あなたは首を差し出さなさい。」そして、彼らが激しく倒されたとき、至福なるマルシアルは両手を主の方へ広げて、次のように祈っていた。「主よ、あなたは我々を取り巻く苦難からの避難所です。我々を迫害する者たちから我々を解き放ってください。」すると直ちに、彼らを殴った者たちは盲目となり、手探りで歩いてメルクリウスの像の前にやって来た。そして、習慣通りに彼らは像に意見を求めたが、それは何も答えなかった。というのも、それは神の天使に火の鎖で縛られたからである。そこで彼らは別の場所にあるユピテルを称えたもう一つの像のところへ行き、それに言った。「私たちの神は怒っています。そのために私たちに答えようとしません。それで私たちは、どうすればよいのかあなたが示してくださいよう、あなたのところへやって来ました。」a) 像は彼らに答えた。「お前たちの神はお前たちに答えを与えることはできない。というのは、神の僕であるマルシアルがここに来て、お前たちに痛めつけられて

以来、それは神の天使たちに火の鎖で縛り付けられたからである。」b) それから、至福なるマルシアルを殴ったために盲目となった祭司たちは、戻って来て聖なる者たちの足下にひれ伏し、赦しを求めた。これに対して、聖なる人は彼らに視力を取り戻させ、皆といっしょにユピテル像のところに来よう命じた。そしてそこで、皆を前にして彼は言った。c) 「この像に不正に住みついている悪霊よ、主イエス・キリストによってお前に命ずる。像から出て、皆の前でそれを砕け。」d) すると悪霊は、命令を実行して像を砕き、像は塵のようになった。

e) とところで、この村では、男も女も 2600 人が主の名において洗礼を受け、神の僕の命令によって、その場所にあった悪霊たちの像はすべて破壊された。f) この奇跡を聞いて、ある体の麻痺した者が、担架に横たわったまま神の人のところへ自分を連れて来させた。彼は立派な一族の出で、金銀を所有したいへん富裕であった。そして彼がマルシアルの前で存分に祈ったとき、マルシアルは彼の手を取り、そこにいた皆とともに祈り、言った。「ユダヤ人たちが十字架に架けた我らの主イエス・キリストの名において、自分の足で立ちなさい。」すると直ちに、彼は癒され、神を称えた。g) さらに彼は至福なる人に贈り物を捧げたが、彼はそれを受け取ろうとはせず、すべて貧者に与えるよう命じた。

X. 主がマルシアルに出現した。 a) マルシアルはリモージュに入ると、高貴な婦人スサンナの歓待を受ける。b) 一人の狂人がスサンナの家から聖なるマルシアルのところへ連れて来られ、彼の上に十字の印が切られると、悪霊から解放される。c) スサンナは娘のヴァレリアとともに洗礼を受ける。

ところで、至福なるマルシアルがその同じ場所に留まっていたとき、主が幻視のなかで彼に現れ、次のように告げた。「リモージュの町に降つてゆくのを恐れてはならない。なぜなら私はそこであなたを称え、常にあなたとともにいよう。」それから、主の使徒は洗礼を受けた者たちをすべて呼び集めさせ、主から告げられたことを彼らに伝えた。そして彼らを主に委ねると、彼は弟子たちとともにその町に向かった。a) こうして町に入ると、彼らはスサンナという名の高貴な女性の歓待を受けた。翌日、至福なるマルシアルは主のことを公に宣べ伝え始めた。ところで、

スサンナの館には、何本もの鎖で縛られた狂人がいたが、だれも彼を解こうとはしなかった。b)しかし、至福なるスサンナは至福なる方を介してなされた多くのしるしと数え切れない奇跡のことを聞き知ると、他の者たちにしたように、この病人をも癒してくれるよう彼に懇願した。すると彼は彼女に言った。「もしあなたが信じるなら、神の栄光が見られます。(「ヨハネによる福音書」11章40節)」そして、彼が病人の上に十字のしるしを切ると、鎖は砕け、その男は癒された。これを見て、敬うべきスサンナはマルシアルの足下に身を投げ出し、洗礼を授けてくれるよう求めた。c)それから聖なるマルシアルは、彼女の一人娘ヴァレリアとともに、彼女に洗礼を授けた。そして、彼が彼女らのために主に祈ると、彼女らは二人とも聖霊に満たされた。ところで、スサンナの家の者たちは皆、自由人も奴隷も600人が洗礼を受けた。

XI. マルシアルは説教を行い劇場に行く。a)マルシアルは連れの者たちとともに祭司たちから暴行を受ける。b)彼は投獄されるが、神の光で照らされる。c)囚われた者たちは神のはからいによって解放される。d)地震と稲妻。e)祭司たちは稲妻に打たれて死ぬ。f)人々がマルシアルのところに駆けつける。g)祭司たちは蘇らされる。h)この物語の著者アウレリアヌスはマルシアルによって蘇らされた祭司のうちの一人であった。i)祭司たちはマルシアルの教えを認める。j)2万8000人が洗礼を受ける。k)聖ステファノを称えて建てられた教会。

その後ついに、彼は弟子たちとともに神の王国の福音を説くために劇場へと向かった。a)偶像の祭司たちは憤慨し、彼らを酷くむち打った後に投獄した。さて翌日、昼の3時頃、至福なるマルシアルは主に祈って、こう述べた。「不滅の光である主イエス・キリストよ。私たちとともに永遠に輝く光をお与え下さい。それは、あなたの名のために私たちを真っ暗な牢獄に入れた闇の子らが、喜ぶことのないようにするためです。」

b)彼がこのように述べるとすぐに、そこに太陽の光があるかのように、大きな光が牢獄のなかで輝きだした。c)そして、皆の鎖が切れて、扉が開くと、そこにいたすべての者たちが至福なる方の足下にひれ伏して、洗礼を受けたいと願った。d)さらに、町に大きな地震が起き、稲妻と雷鳴が鳴り響き、そのためすべての異教徒たちは助かろうとして偶像

の神殿へと逃れた。e) 一方、神の僕たちを打った異教の祭司たちは稲妻に打たれて死んだ。なぜなら、主は自らの僕たちがそのような危害をただ受けていることを苦痛に感じたからである。f) その時、だれもかれもが恐れおののいて牢獄へ向かった。そして、そこから聖なる者たちを連れ出すと、聖なるマルシアルの足下にひれ伏し、叫びを上げてこう言った。「いと聖なる父よ、もしあなたがこの死んだ者たちをあなたの神の名において蘇らせたなら、私たちも皆、いっしょにその神を信じましょう。」それで、至福なるマルシアルは両手を天に広げて言った。「主よ、あなたは私たちに『もしからし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かってここから移れと命じても、そのとおりになる(「マタイによる福音書」17章20節)』とおっしゃいました。私たちの信仰はそれほどのものなのですから、この者たちが天使の手で蘇らされるよう命じてください。」このように述べると、彼は死者の亡骸の方へ進んで行って、こう述べた。「ユダヤ人たちが十字架に架け、そして3日目に蘇った主イエス・キリストの名において、起き上がりなさい。そして主に対して行うべきことを人々に語りなさい。」g) すると彼らは起き上がり、聖なる者たちの足下にひれ伏して、言った。「私たちが私たちがなすべきことを知らず、あなたたちに対して罪を犯しました。」h) これを見ると、すべての人々が、神殿の祭司たち、もちろん蘇ったアウレリアヌスやアンドレアとともに、声をつにして叫び、話し始めた。i) 「この神の人が宣べ伝える方の他には天にも地にも神はいません。」翌日、主の弟子は、若い者から年老いた者まで、すべての住民を集めるよう命じ、父と子と聖霊の名において、罪の赦しのために、彼らに洗礼を授けた。j) その数は2万2000人であった。それから彼は皆を連れてユピテル、メルクリウス、ディアナ、そしてヴィーナスの像のある偶像の神殿へと赴いた。k) そして偶像を破壊すると、彼はそこに最初の殉教者ステファノを称えて教会を建てた。

XII. スサンナの死。a) 敬意に満ちた埋葬。b) 教会に譲渡された収入と財産。c) ヴァレリアは純潔の誓いを立てる。d) 清い乙女としての勤め。e) ヴァレリアの許嫁のステファヌス公がリモージュに到着した。f) ヴァレリアは貧者に自らの財産を与える。g) ステファヌス公はヴァレリアを召し出す。h) ヴァレリアは死の判決を受ける。i) ヴァレリアの預言。j) 至福なるヴァレリアの祈り。k) 天から聞こえた声。l) 斬首された至福なるヴァレリア。m) ヴァレリアの魂が運ばれて行くのが見られる。

ところで、至福なるスサンナは苦痛に満ちたこの世を去り、天使たちに迎えられて、幸福のうちにキリストのもとへ赴いた。a) 確かに、彼女は至福なるマルシアルによって敬意をもって葬られ、香料を施して埋葬された。b) 彼女は至福なる人に、莫大な贈り物と財産、すなわち金や銀、葡萄畑や多くの地所を委ねた。さらに多くの奴隷も委ねたが、それは主の人自らがこの世を去ってキリストのもとに赴こうというときに、この者たちが必要に応じて彼の埋葬場所で然るべき奉仕を提供するためであった。c) 彼女の死後、彼女の至福なる娘ヴァレリアは聖なるマルシアルのところに赴き、誓いを立てて、主に終生の純潔を約束した。この誓いを守ることを願って、彼女は毎日至福なる人の説教にかよっていた。そして救いの言葉を聞いて、それらをよい土地のように守り、自分から主に対して 100 倍の収穫をもたらしていた。d) なぜなら、彼女は聖霊に満たされて夜も昼も祈り続け、徹夜の行と断食とあらゆる善行によって、心身ともに純潔であり続けられるほどに自らが誉められるべき人間であることを神に示した。e) ところで、彼女の許嫁がリモージュに到着したと聞いて、また、彼女が純潔を守ると主に誓ったことに彼が怒るだろうと知って、f) 彼女はすべての財産を貧者たちに分け与え始めた。というのは、彼女は聖なる方が次のように説教し話すのを聞いていたからである。我らの主イエス・キリストは、ある若者に永遠の命を得るためには何をなすべきかと尋ねられたとき、「殺すな、盗むな、偽証をするな。」「マタイによる福音書」19章18節、「ルカによる福音書」18章20節」という掟を守るよう彼に答えたのだと。そして、若者がそれらはみな彼が子供のときから守ってきたことだと主に答えたとき、主は若者に、もし完全でありたいのであれば、持ち物をすべて売り払って貧者に分け与え、

そして天に宝を得て自分に従うよう言ったのだと。これらの言葉を聞いて、輝かしい乙女ヴァレリアは、若者が侮って手に入れるのを先延ばしにしてしまったこの完全さに達したいと願い、彼女が宝物庫に持っていたどんな財産でもすべて、すなわち金や銀、多くの衣装や宝石をも貧者に分け与えた。というのは、地所や土地や館の奴隷たちは、敬うべき母がおこなったのと同じ時に、既に聖なるマルシアルに委ねていたからである。そして、それは彼の死後、彼の聖なる亡骸がそこに埋葬されるためであった。

g) こうしたことがあった後に、上述の乙女の許嫁、ステファヌス公がリモージュへやって来て、前述の許嫁を連れてくるよう命じた。公はローヌ川から大洋まで支配を握り、ピレネー山脈に到るまでバスク人やゴート人の地方を統治する権限を持っていた。彼女との会話や多くの者たちの証言から、彼は彼女が自分と結婚しないだろうと知り、またそれが確かだろうと判断した。彼は大いに怒り、これ以上彼女と話すのが耐えられなくなった。h) そして、彼は激情にあふれ、町の外で、彼女を死刑に処すよう命じた。i) そして斬首に連れて行かれる間に、彼女は暴君に言った。「愚かな方よ、今夜、あなたの命は取りあげられます。あなたが用意した物は、いったいだれのものになるのでしょうか。（「ルカによる福音書」12章20節）」j) そして両手を天にあげ、彼女は次のように祈った。「主よ、私はあなたに私の魂を委ねます。私が打ち首にされるのは、私があなたを愛したからです。主よ、あなたのはしめをあなたの栄光で包み、天使の大群を私を助けに遣わして、あなたのはしめの肉体を離れて行く魂に悪魔が近づかないようにしてください。確かに私は、あなたとの結婚から遠ざけられることのないよう、あなたとの婚礼の床が奪われることのないよう、そしてあなたへの告白を裏切ることのないよう、地上の許嫁とは結婚しなかったのです。こうして、私はあなたから離されるより死を選んだために、首をはねに連れて来られたのです。」k) 彼女がこれらの言葉を述べたとき、天から声が聞こえて次のように言った。「ヴァレリアよ、恐れることはない。なぜなら天使たちがあなたを終わりのない輝きの中に受け入れようと待っているのだから。」この声を聞くと、輝かしい乙女は喜びに満ち、眼差しを天に向けて言った。「主よ、私の霊を御手にゆだねます。（「ルカによる福音書」23章46節）」l) このよ

うに述べると、彼女は進んで首を差し出した。そして、首は執行人の一撃ではねられた。m)キリスト教徒も異教徒も皆、彼女の魂が肉体を離れるや太陽のように輝き、天使の賛美歌に伴われ、火の玉とともに天に運ばれて行くのを見た。その間、天使の合唱隊は次のように歌っていた。「キリストの殉教者であるヴァレリアよ、あなたは至福に満ちている。なぜならあなたは主の前で常に忠実であり、終わりを知らない光の輝かしさのなかで、主の掟を守ったのだから。」

ⅩⅧ. 侍臣がこれらをステファヌスに報告する。a) 侍臣はたちまち死ぬ。b) ステファヌス公の悔悛。c) ステファヌスの侍臣が蘇らされる。d) 聖なるマルシアルの祈り。e) 聖なるマルシアルが死者に命ずる。f) 蘇った侍臣が自らの罪を告白する。g) ステファヌス公はすべての家臣とともに洗礼を受ける。h) ステファヌスは教会の建設のために財産を捧げる。i) 聖職者には収入が与えられる。j) 毎日 300 人の貧者を養うための施療院が建てられる。k) 600 人の貧者のための施療院。l) 至福なるヴァレリアの埋葬場所に教会が建てられる。

これらを見聞きした後、ヴァレリアの首をはねたステファヌスの侍臣は、主人であるステファヌス公のところへ大急ぎで駆けつけ、見聞きしたすべてを説明した。彼は話を終えると、最後に再び至福なる乙女が斬首に向かいながら彼に話した言葉、すなわち彼はその夜死ぬとの言葉に話を戻した。a)そして、彼は話しを終えるとたちまち、彼女が告げたとおりに天使に打たれ公の足下に倒れて死んだ。こうして乙女に対する恐れと震えが、彼と彼の全軍を襲った。b)公は粗衣を身にまとうと、至福なるマルシアルを呼び寄せるよう求めた。そして彼が自らの前に現れると、彼はマルシアルの足下に身を投げ出し、涙を流して語り始めた。「いとも聖なる方よ、私は潔白な血を流ささせて罪を犯しました。しかし私は、あなたが私の侍臣を蘇らせ、私があるあなたの神を信じられるようにしてくださいます。」c)するとマルシアルは彼に答えた。「もしあなたが心から信じるのであれば、主は彼を蘇らせるでしょう。」それから、すべてのキリスト教徒を自分の所へ呼び寄せると、彼は次のように彼らに話しかけた。「主がこの男に蘇れと命ずるよう、皆で主に祈りましょう。」d)そして静まりかえったなかで彼は祈った。「全能の神である

主よ、あなたは世界の創造の前から父と聖霊とともにありました。そして、闇の中にあった人類が真理の光へと至るために、地上にやってきました。私たちはこの男を蘇らせてくださるよう、あななの大きなお慈悲を願います。それは、すべての民族があなたを知り、あなたの名が全人類に示されるためです。」e) このように述べた後、彼は亡骸のところへ行き、その手を取って言った。「ユダヤ人たちが十字架に架け、3日目に死者のなかから蘇った全能の神が、あなたを蘇らせる。主の名において、自分の足で立ち上がりなさい。」f) 彼は即座に自分の足でよろめきながら立ち上がると、言った。「神の聖なる方、私は潔白な血を流させて罪を犯しました。しかし、お願いです。私に悔い改めの洗礼を授けてください。」

g) ステファヌス公もこのしるしを見ると、彼の足下に身を投げ、犯した罪に対する寛大と赦しを求めた。そこで神の人は彼に処女殉教者の殺害に対する贖罪を課し、彼と彼の従者たち、軍指導者と彼の全軍、そして男女のすべての住民1万5000人に洗礼を授けた。h) 実に前述の公は、主を称えて方々に教会を建てられるよう、神の人に多くの贈り物を与えた。さらに彼は聖なる人に莫大な所有地、葡萄畑と奴隷のある少なからぬ地所、いかほどであれ彼がリムーズン地方に持っていた土地を授けた。i) それは、こうして建てられる予定の教会の品位を保ち、またこれらの教会で神に仕えることとなる聖職者たちがいかなる困窮からも救われるためであった。j) こうした後、前述の公は貧者のための施設を造るよう命じた。彼は、そこでは毎日、処女殉教者であるヴァレリアを記念する施しによって、300人の貧者に食事が与えられるよう定めた。k) 彼はまた自らと至福なる人マルシアルのために、貧者のための施設をもう一つ建てたが、そこでは毎日600人の貧者の群を集め、食事を与えるよう定めた。公はさらに、至福なるマルシアルに、自分の魂が肉体を出た後、至福なる方の墓の傍らに自分の墓を作ってくれるよう頼んだ。l) しかし、栄光ある処女殉教者ヴァレリアの墓の上には師の教会を建てるよう命じ、さらに間もなく、この教会を飾るために多くの贈り物を捧げた。